

螢

登勢は一人娘である。弟や妹のいないのが寂しく、生んで下さいとせがんでも、そのたび母の耳を赧くさせながら、何年かたち十四歳に母は、五十一で思いがけず妊った。母はまた赧くなり、そして女の子を生んだがその代り母はとられた。すぐ、乳母を雇い入れたところ、折柄乳母はかぜけがあり、それがうつったのか赤児は生まれて十日目に死んだ。父親は傷心のあまりそれから半年たたため内になくなつた。

泣けもせずキョトンとしているのを引き取つてくれた彦根の伯父が、お前のように耳の肉のうすい女は総じて不運になり易いものだといったその言葉を、登勢は素直にうなずいて、この時からもう自分のゆくすえというものをいつどんな場合にもあらがじめ諦めて置く習わしがついた。が、そのために登勢はかえって屈託がなくなつたようで、生まれつき

の眇眼もいつかなおつてみると、思いつめたように見えていた表情も自然と消えてえくぼの深さが目立ち、やがて十八の歳に伏見へ嫁いだ時の登勢は、鼻の上の白粉がいつもはげているのが可愛い、汗かきのピチピチ弾んだ娘だった。

ところが、嫁ぎ先の寺田屋へ著いてみると姑のお定はなにか思つてか急に頭痛を触れて、祝言の席へも顔を見せない、お定は寺田屋の後妻で新郎の伊助には継母だ。けれども、よしんば生さぬ仲にせよ、男親がすでに故人である以上、誰よりもまずこの席に列つていなければならぬこのひとだ。それを頭痛だとはなにごとかと、当然花嫁の側からきびしい、けれども存外ひそびそした苦情が持ち出されたのを、仲人が寺田屋の親戚の内からにわか
に親代わりを仕立ててなだめる……そんな空気をひとごとのように眺めていると、ふとあ
やかな螢火が部屋をよぎった。祝言の煌々たる灯りに恥じらう如くその青い火はすぐ消え

てしまつたが、登勢は気づいて、あ、螢がと
白い手を伸ばした。

花嫁にあるまじき振舞だつたが、仲人はさ
すがに苦勞人で、宇治の螢までが伏見の酒に
あくがれて三十石で上がつて来よつた。船も
三十石なら酒も三十石、さア今夜はうんと……
、飲まぬ先からの酔つた声で巧く捌いてし
まつた。伏見は酒の名所、寺田屋は伏見の船
宿で、そこから大阪へ下る淀船の名が、三十
石だとは、もとよりその席の誰ひとり知らぬ
者はなく、この仲人の下手な洒落に気まずい
空気も瞬間ほぐされた。

ところが、その機を外さぬ盞事がはじまつ
てみると、新郎の伊助は三三九度の盞をまる
で汚い物を持つ手つきで、親指と人差指の間
にちよつぴり挟んで持ち、なお親戚の者が差
出した盞も盃洗の水で丁寧にした後でなけ
れば受け取ろうとせず、あとの手は晒手拭で
音のするくらい拭くというありさまに、かえ
すがえす苦り切つた伯父は夜の明けるのを待

つて無理に辛抱せんでもええ、気に食わなんだからいつでも出戻つてこいと登勢に云い残したまま、さつさと彦根へ歸つてしまった。

伯父は何もかも見抜いていたのだろうか。

その日もまた頭痛だという姑の枕元へ挨拶に上ると、お定は不機嫌な唇で登勢の江州訛をただ嗤わらつた。小姑の眉も嗤い、登勢のうすい耳はさすがに真赧になつたが、しかしそれから三日もたつともう嗤われても、にこつとえくぼを見せた。

その三日の間もお定は床をはなれようとせず、それがいかにも後家の姑めいて奉公人たちにはおかしかつたが、いつまでもそうしてゐるのもさすがにおとなげ無いとお定も思つてか、ひとつには辛抱も切れて、起き上ろうとすると腰が抜けて起たなかつた。医者に見せると中風だ。

お定は悲しむまえに、まず病が本物だったことをもつけの倅にわめき散らして、死神が舞い込んで来よつた。嫁が来た日から病に取

り憑かれたのだというその意味は、登勢の胸にも冷たく落ち、この日からありきたりの嫁苛めは始まるのだと咄嗟に登勢は諦めたが、しかし苛められるわけは強いて判ろうとはしなかつた。

けれども、寺田屋には、御寮はん、笑うてはる場合やおへんどっせと口軽なおとみという女中もいた。お定は先妻の子の伊助がお人善しのぼんやりなのを倅い、寺田屋の家督は自身腹をいためた楢に入贅とつてつがせたいらしい。ところが親戚のものはさすがに反対で、伊助がぼんやりなればしつかり者の嫁をあてがえばよいと、お定に頭痛起させてまで無理矢理登勢を迎えたのだ。してみれば登勢は邪魔者だ……。登勢は自分を憐れむまえに先ず夫の伊助を憐れんだ。

伊助は襷こそ掛けなかつたが、明けても暮れてもコトコト動きまわつた。しかし、客の世話や帳場の用事で動くのではなく、ただ眼に触れるものを、道具、畳、蒲団、襖、柱、

廊下、その他片つ端から汚い汚いと云いながら、齒がゆいくらい几帳面に拭いたり掃いたり磨いたりして一日が暮れるのである。

目に見えるほどの塵一本身のがさず、坐っている客を追い立てて坐蒲団をパタパタはたいたり、そこらじゅう拭きまわったり、ただの奇麗好きとは見えなかった。祝言の席の仕草も想い合わされて、登勢はふと眼を掩いたかったが、しかしまた、そんな狂気じみた神経もあるいは祖先からうけついだ船宿をしみ一つつけずにいつまでも奇麗に守って行きたいという、後生大事の小心から知らず知らず来た業かもしれないと思えば、ひとしお哀れさが増した。伊助は鼻の横に目立って大きなほくろが一つあり、そこに触りながら利く言葉にの癖も少しはあった。

伊助の潔癖は登勢の白い手さえ汚いと躊躇うほどであり、新婚の甘さはなかったが、いつか登勢にはほくろのない顔なぞ男の顔としてはもうつまらなかった。そして、寺田屋を

いつまでもこの夫のものにして置くためなら乾いた雑巾から血を絞り出すような苦労もいとわぬと、登勢の朝は奉公人よりも早かったが、しかし左器用きうちよの手に重い物さげてチヨコチヨコ歩く時の登勢の肩の下りぐあいには、どんなに苦労してもいつかは寺田屋を追われるのではなかるうかというあらかじめの諦めが、ひそかにぶらさがっていた。

その頃、西国より京・江戸へ上るには、大阪の八軒屋から淀川を上って伏見へ着き、そこから京へはいるという道が普通で、下りも同様、自然伏見は京大阪を結ぶ要衝として奉行所のほかに藩屋敷が置かれ、荷船問屋の繁昌はもちろん、船宿も川の東西に数十軒、乗合の三十石船が朝昼晩の三度伏見の京橋を出る頃は、番頭女中のほかに物売りの声が喧しかった。あんさん、お下りさんやおへんか。お下りさんはこちらどっせ、お土産おみやげはどうです。おちりにあんぽんたんはどうです……。

京のどすが大阪のだすと擦れ違うのは山崎あ

たり故、伏見はなお京言葉である。自然彦根育ちの登勢にはおちりが京塵紙、あんぽんたんが菓子の名などと覚えねばならぬ名前だけでも数え切れぬくらい多かつたが、それでも一月たつともう登勢の言葉は姑も唾えなつた。

一事が万事、登勢の絞る雑巾はすべて乾いていたのだ。姑は中風、夫は日が一日汚い汚いにかまけて、小姑の帽は芝居道楽で京通いだとすれば、寺田屋は十八歳の登勢が切り廻していかなければならぬ。奉公人への指図は勿論、旅客の応待から船頭、物売りのほかに、あらくれの駕籠かきを相手の気苦労もあつた。伏見の駕籠かきは禪一筋で銭一貫質屋から借りられるくらい土地では勢力のある雲助だつた。

しかし、女中に用事一つ云いつけるにも、先ずかんにんどつせと謝るように云つてからという登勢の腰の低さには、どんなあらくれも暖簾に腕押しであつた。もつとも女中のなかには、そんな登勢の出来をほめながら、内

心ひそかになめている者もあつた。ところが
ある日登勢が大阪へ下つて行き、あくる日帰
つて来ると、もう誰も登勢をなめることは出
来なかつた。

それまで三十石橋といえは一艘二十八人の
乗合で船頭は六人、半日半夜で大坂の八丁堀
へ著いていたのだが、登勢が帰つてからの寺
田屋の船は八丁堀の堺屋と組み合つて船頭八
人の八挺艦で、どこの船よりも半刻速かつた。
自然寺田屋は繁昌したが、それだけに登勢の
身体は一層忙しくなつた。

おまけに中風の姑の世話だ。登勢、尿ししやつて
んか。へえ。背中さすつてんか。へえ。お茶
のましてんか。よろしおす。半刻ごとにお定
の枕元へ呼びつけられた。伊助の神経ではそ
んな世話は思いも寄らず、楣も尿の世話と聞
いては逃げるし、奉公人もいやな顔を見せた
ので、自然気にいらぬ登勢に抱かれねばお定
は小用も催せなかつた。

登勢はいやな顔一つ見せなかつたから、痒

いところへ届かせるその手の左利きをお定はふとあわれみそうなものなのに、やはり三角の眼を光らせて、鈍臭い、右の手使いなはれ。そして夜中用事がなくても呼び起すので、登勢は帯を解く間もなく、いつか眼のふちは黝み、古綿を千切つて捨てたようにクタクタになった。そして、もう誰が見ても、祝言の夜、あ、螢がと叫んだあの無邪気な登勢ではなかつたから、これでは御隠居も追い出せまいと人々は沙汰したが、けれどもお定はそんな登勢がかえつて癩にさわるらしく、病気のため嫁の悪口いいふらしに歩けぬのが残念だと呟いていた。

ある日寺田屋へ、結い立ての細銀杏から伽羅油の匂いをプンプンさせた色白の男がやって来て、登勢に風呂敷包みを預けると、大事なものがはいつている故、開けて見てはならんぞ。脅すような口を利いて帰って行った。

五十吉といい今は西洞院の紙問屋の番頭だが、もとは灰吹きいそきちの五十吉と異名をとつた破落戸しころつき

でありながら、寺田屋の婿はいずれおれだといふような顔が癩だと、おとみなどはひそかに塩まいていたが、お定は五十吉を何と思つていたろうか。

五十吉は随分派手なところを見せ、梶の機嫌をとるための芝居見物にも思い切つた使い方するのを、梶はさすがに女で満更でもないらしかつた。

五十吉は翌日また渋い顔をしてやって来ると風呂敷包みを受け取るなり、見たな。登勢の顔をにらんだので、驚いて見なかつた旨ありていに云うと、五十吉はいや見たといつてきかず、二、三度押し問答の末、見たか見ぬか、開けてみりや判ると、五十吉が風呂敷き包を開けたとたん、出てきた人形が口をあいて、見たな、といきなり不気味な声で叫んだので、登勢は肝をつぶした。そして、人形が口を利いたのを見るのははじめてだと不思議がるまえに先ず自分の不運を何か諦めて、ひたすら謝ると、果たして五十吉は声をはげま

しして、この人形はさる大名の命でとくに阿波の人形師につくらせたものだ。それを女風情の眼でけがされたとあつてはもう献上できない。サア、どうしてくれると騒ぎはお定の病室へ移されて、見るなと云われたものを見て置きながら見なかったとは何と空恐ろしい根性だと、お定のまわらぬ舌は、わざわざ呼んできた親戚の者の前でくどかった。

うなだれていた顔をふと上げると登勢の眼に淀の流れはゆるやかであった。するとはや登勢は自分もまた旅びとのようにこの船宿に仮やどりをしたのにすぎなかったのだと、いつもの諦めが頭をもたげて来て、彦根の雪の朝を想った。

ところが、ちょうどそこへ医者が見舞って来て、お定の脈を見ながら、ご親戚の方が集まっておられるようだが、まだまだそんな重体ではござらんと笑ったあと、近頃何か面白い話はござらぬか。そう云って自分から語り出したのは、近頃京の町に見た人形という珍

妙なる強請が流行っているそうな、人形を使つて因縁をつけるのだが、あれは文楽のからくりの仕掛けで口を動かし、また見たなと人形がものを云うのは腹話術とか言うものを用いていることがだんだんに判つて奉公所でも眼を光らせかけたようだ……というその話の途中で、五十吉は席を立つてしまい、やがて二、三日すると五十吉の姿はもう京伏見のどこにも見当らなかつた。

そして、梶がなに思つてか寺田屋から姿を消してしまつたのは、それから間もなくのことだつたが、その行方をむなしく探しているうちに一年たち、あの寝苦しい夏の夜、登勢は遠くで聴える赤児の泣声が耳について、いつまでも眼が冴えた。生まれて十日目に死んだ妹のことを想い出したためだろうか。ひとつには登勢はなぜか赤児の泣声が好きだつた。父親も赤児の泣声ほどまじりけのない真剣なものはない。あの火のついたような声を聴いていると、しぜんに心が澄んでくると云い云

いしていたが、そんなむずかしいことは知らず、登勢は泣声が耳にはいると、ただわけもなく惹きつけられて、ちょうどあの黙々とした無心に身体を焦がしつづけている螢の火にじつと見入っている時と同じ気持ちになり、それは何か自分の指を噛んでしまいたいような自虐めいた快感であつた……。

赤児の泣声はいつか消えようとせず、降るような夏の星空を火の粉のように飛んでいた。じつと聴きいつていた登勢は急にはっと起き上ると、蚊帳の外へ出た。そして表へ出ると、果して泣声は軒下の暗がりのなかにみつかつた。捨てられているのかと抱いてあやすと、泣きやんで笑つた。蚊に食われた跡が涙に汚れてきたない顔だつたが、えくぼがあり、鼻の低いところ、おでこの飛び出ているところなど、何か伊助に似ているようであつたから、その旨伊助に云い、拾つて育てようとはかつたところ、う、う、家のなかが、よ、よごれるやないか。伊助は唇をとがらし、登勢がま

だ子をうまぬことさえ喜んでいたくらいだったのだ。

けれど、ふだんは何ひとつ自分を主張したことのない登勢が、この時ばかりは不思議なくらいわがままだった。伊助はしぶしぶ承知した。もつとも伊助は自分が承知してもお定がうんと言う筈はないと、妙なところで継母を頼りにしていたのかも知れなかった。ところが、いつもそんな嫁のわがままを通す筈のないお定が、なんの弱みがあつてか強い反対もしなかった。

赤児はお光と名づけ、もう乳ばなれする頃だった故、乳母の心配もいらず、自分の手一つで育てて四つになった夏、ちようど江戸の黒船さわぎのなかで登勢は千代を生んだ。千代が生まれるとお光は継子だ。奉公人達はひそかに残酷めいた期待をもつたが、登勢はなぜか千代よりもお光の方が可愛いらしかった。継子の夫を持てばやはり違うのかと奉公人たちはかんたんにすかされて、お定の方へ眼を

配るとお定もお光にだけは邪険にするような
気配はないようだった。

お定は気分のよい時など背中を起してちょ
ぼりと坐り、退屈しのぎにお光の足袋を縫う
てやつたりしていたが、その年の暮からはも
う臥た切りで春には医者も手をはなした。そ
して梅雨明けをまたずにお定は息を引き取っ
とつたが、死ぬ前の日はさすがに叱言はいわ
ず、ただ一言お光を可愛がってやと思いがけ
ぬしんみりした声で云つて、あとグウグウ鼾
をかいて眠り、翌る朝眼をさましたときはも
う臨終だった。失踪した梶のことをついに一
言もいわなかったのは、さすがにお定の気の
強さだったろうか。

お定の臥ていた部屋は寺田屋中で一番風通
しがよかつた。まるで七年薬草の匂いの褐^{あか}
くしみこんだその部屋の畳を新しく取り替え
て、蚊帳をつると、あらためて寺田屋は夫婦
のものだった。登勢は風呂場で水を浴びるの

だった。そんなことはしたことはなく、今は誰はばからぬ気軽さに水しぶきが白いからだに降り掛つて、夢のようであつた。

蚊帳へ戻ると、お光、千代の寝ている上を伊助の放つた螢が飛び、青い火が川風を染めていた。あ、螢、螢と登勢は十六の娘のように蚊帳中はねまわつて子供の眼を覚ましたが、やがて子供を眠らせてしまつと、伊助はおずおずと、と、と、登勢、わい、じよ、じよ、浄瑠璃習つてもかめへんか。酒も煙草も飲まず、ただそこらじゅう拭きまわるよりほかに何一つ道楽のなかつた伊助が、横領されやしないかとひやひやして来た寺田やがはつきり自分のものになつた今、はじめて浄瑠璃を習いたいというその気持に、登勢は胸が温まり、お習いやす、お習いやす……。

伊助の浄瑠璃は応りの小唄ほどではなつたが、下手ではなかつた。習いはじめて一年目には土地の天狗番付に針の先で書いたような字で名前が出て、間もなく登勢が女の子を

生んだ時は、お、お、お光があつてお染がなかつたら、の、の野崎村になれへんさかいにと、子供の名をお染にするというくらいの凝り方で、千代のことは鶴千代と千代萩で呼び、汚い汚いといいながらも子供を可愛がった。宇治の螢狩も浄瑠璃の文句にあるといえ、連れて行くし、今が登勢は仕合わせの絶頂だったかも知れなかった。

しかし、それだけにまた何か悲しいことが近い内に起こるのではなからうかと、あらかじめ諦めて置くのは、これは一体なんとしたことであろう。

果たしてお染が四つの歳のことである。登勢も名を知っている彦根の城主が大老になった年の秋、西北の空に突然彗星があらわれて、はじめ二三尺の長さのものがいつか空一杯のに伸びて人魂の化け物のようにのたうちまわったかと思うと、地上ではコロリという疫病が流行りだして、お染がとられてしまった。

ところが悪いことは続くもので、その年の

冬、梶が八年振りにひよつくり戻って来るとお光を抱き寄せて、あ、この子や、この子や、ねえさんこの子はあての子どっせ、七年前に寺田屋の軒先へ捨子したのは今だからこそ白状するがあてどしたんえという梶の言葉に、登勢はおどろいてお光を引き寄せたが証拠はこの子の背中に……といわれるともう登勢は弱かった。お光は背中に伊助と同じくらいのほくろがあり、そこから二本大人のような毛が抜いても抜いても生え、嫁入りまえまで癒るかど登勢の心配はそれだったのだ。が、今はそんな心配どころかと顔を真蒼にしてきけば、五十吉のあとを追うて大阪へ下った梶は、やがて五十吉の子を産んだが、もうその頃は長町の貧乏長屋の家賃も払えなかった。致し方なく五十吉は寄席で蠟燭の芯切りをし、梶はお茶子に雇われたが、足手まといはお光だ。寺田屋の前へ捨てればねえさんのこと故拾ってくれるだろうと思つてそうしたのだが、やっぱり育ててくれて、礼を云いますと頭を下

げると、梶は、さアお母ちゃんと一緒に行きまひよ。お父ちゃんも今堅気で、お光ちゃん
の夢ばっかし見てはるえ。あっという間にお
光を連れて、寺田屋の三十石に乗ってしまっ
た。

細々とした暮しだとうなずけるほどの梶の
やつれ方だったが、そんな風にしゃあしゃあ
と出て行く後姿を見ればやはりもとの寺田屋
の娘めいて、登勢はそんな法はないと追いつ
いてお光を連れ戻す気がふとおくれてしまっ
た。頼りにした伊助も、じよ、じよ、浄瑠璃
にようある話やとぼそんと云うだけで、あと
ぽかんと見送っていた。

おちりとあんぽんたんはどうどす……と物
売りが三十石へ寄って行く声をしょんぼり聴
きながら、死んだ姑はさすがに虫の知らせで
お光が孫であることを薄々かんづいていたの
だろうかと、血のつながりの不思議さをぶつ
ぶつ呟きながら、登勢は暫らく肩で息をして
いたが、あ、お光といきなり立ち上って浜へ

かけつけた時は、もう八丁艦の三十石は淀川を下っていた。暫らく佇んで戻って来ると伊助は帳場の火鉢をせつせと磨いていた。物も云わずにぺたりとそのそばに坐り、畳の一つ所をじつと見て、やがて左手で何気なく糸屑を拾いあげたその仕草はふと伊助に似たが、急に振り向くと、キンキンした声で、あ、お越しやす。駕籠かきが送って来た客へのこぼれるような愛敬は、はやいつもの登勢の明るさで奉公人たちの眼にはむしろ蓮っ葉じみて、高い笑い声も腑に落ちぬくらい、ふといやらしかった。

間もなく登勢はお良という娘を養女にした。樽崎という京の町医者の娘だったが、樽崎の死後路頭に迷っていたのを世話をした人に連れられて風呂敷包みに五合の米入れてやった時、年はときけば、はい十二どすと答えた声がびつくりするほど美しかった。

伊助の浄瑠璃はお光が去ってから急に上達

し、寺田屋の二階座敷が素義会の会場につかわれるなど、寺田屋には無事平穏な日々が流れて行つたが、やがて四、五年すると、西国方面の浪人たちがひそかにこの船宿に泊つてひそびそと、時にはあたり憚らぬ大声を出して、談合しはじめるようになった。しぜん奉行所の宿調べもきびしくなる。小心な伊助は気味わるく、もう浄瑠璃どころではなかつたが、おまけにその客たちは部屋や道具をよごすことを何とも思つていず、談論風発すると畳の眼をむしりとする癖の者もいた。煙草盆はひっくりかえす、茶碗が転る、銚子は割れる、興奮のあまり刀を振りまわすこともあり、伊助の神経には堪えられぬことばかりであつた。

登勢は拔身の刀などすこしも怖がらず、そんな客のさつぱりした気性もむしる微笑ましかつたが、しかし夫がいやな顔をしているのを見れば、自然いい顔も出来ず、ふと迷惑めいた表情も出た。ところが、ある年の初夏、八十人あまりの主に薩摩の士が二階と階下と

に別れて勢揃いしているところへ駆けつけて来たには同じ薩摩訛りの八人で、鎮撫に来たらしかつたが、きかず、押し問答の末同士討ちで七人の士がその場で死ぬという騒ぎがあった。騒ぎがはじまったとたん、登勢はさすがに這うようにして千代とお良を連れて逃げたが、ふと聴えたおいごと刺せという言葉がなぜか耳について離れなかった。

あとで考えれば、それは薄菊石の顔に見覚えのある有馬という士の声らしく、乱暴者を壁に押えつげながら、この男さえ殺せば騒ぎは鎮まると、おいごと刺せ、自分の背中から二人を突き刺せ、と叫んだこの世の最後の声だったのだ。

精一杯に張り上げたその声は何か悲しい響きに登勢の耳にじりじりと焼きつき、ふと思えば、それは火のついたようなあの赤児の泣き声の一途さに似ていたのだ。

その日から、登勢はもう彼らのためにどんな親切もいとわぬ、三十五の若い母親だった。

同じ伏見の船宿の水六の亭主などは少し怪しい者が泊れば直ぐ訴人したが、登勢はおいごと刺せと叫んだあの声のような美しい声がありきたりの大人の口から出るものかと、泊った浪人が路銀に困っているときけば三十石の船代はとらず、何かの足しにとひそかに紙に包んで渡すこともあった。追われて逃げるものにはとくに早舟を仕立てたことは勿論である。

やがてそんな登勢を見込んで、この男を匿ってくれと、薩摩屋敷から頼まれたのは坂本龍馬だった。伊助は有馬の時の騒ぎで畳といわず壁といわず、柱といわず、そこらじゅう血まみれになったあとの掃除に十日も掛かった自分の手を、三月の間暇さえあれば嗅いでぶつぶつ云っていたくらい故、坂本を匿うのには気が進まなかったが、そんなら坂本さんのおいやす間、木屋町においやすたらどうですといわれると、なんの弱みがあつてか、もう強い反対もしなかった。

京の木屋町には寺田屋の寮があり、伊助は京の師匠のもとへ通う時は、そこで一晩泊つて来る習わしだった。なお登勢は坂本のことを慮つて口軽なおとみも暫く木屋町の手伝いに遣つた。ところがある日おとみはこっそり帰つて来て云うのには、お寮はん、えらいことどつせ。木屋町にはちゃんと旦那はんの妾が……しかし登勢は顔色一つ変えず、そんな事を云いに帰つたのかと追いかえした。おとみは木屋町へ帰つて何と報告したのか、それから四、五日すると、三十余りの黒い痩せた女がおずおずとやって来て、あの、こちらは寺田屋の御寮人様で、あ、そうでございます。たかと登勢の顔を見るなり云うのには、実は手前共はもう三年前からこちらの御主人にお世話をしていたいておりましたが、一度御寮人様にそのことでお詫びやら御礼かたがた御挨拶に上らねばと思ひながらもつい……。公然と出入りしようという凶太い肚で来たのか、それとも本当に一言謝るつもりで来たの

か、それは伊助の妾だった。

登勢はえくぼを見せて、それはそれは、わがまま者の伊助がいつも厄介どした、よその人とちごて世話の掛る病のある人どすさかに、あんたはんかてたいていやおへんどしたやろ。けっして皮肉ではなく愛嬌のある云い振りをして、もてなして帰したが、妾は暫く思案して伊助と別れてしまった。あとで思えば気の良さそうな女だった。

登勢は何かの拍子にその事を坂本に話し、色の黒いひとは気がええのんどっしやるかと云うと、俺も黒いぞと坂本は無邪気なもので、誰にも云うて貰っては困るが、俺は背中にかいアザがあつて毛が生えているので、誰の前でも肌を見せたことがない。登勢はその話をきいてふっとお光を想い出し、もう坂本の食事は誰にも運ばせなかつた。そろそろ肥満して来た登勢は階段の登り降りがえらかつたが、それでも自分の手で運び、よくよく外出しなければならぬ時は、お良の手を煩わし女

中には任せなかった。

もうすっかり美しい娘になっていたお良は、女中の代りをさせるのではないが坂本さんは大切な人だからという登勢の言葉をきくまでもなく、坂本の世話はしたが、その後西国へ下った坂本がやがてまた寺田屋へふらりと顔を見せるたび、耳の附根まで赧くして喜ぶのは、誰よりも先ずお良だった。ある夜お良は真蒼な顔で坂本の部屋から降りて来たので、どうしたのかときくと、坂本さんに怪談を聴かされたという。二十歳にもなつてと登勢はわらったが、それから半年たった正月、奉行所の一行が坂本を襲うて来た気配を知ったとたん、裸かのまま浴室からぱつと抜け出して無我夢中で坂本の部屋へ急を知らせた時のお良は、もう怪談に真蒼になつた娘とも思えず、そして坂本と夫婦にならねば生きておれないくらいの恥ずかしさをしのんでいた。

それは火のついたようなあの赤児の泣き声に似て、はつと固唾をのむばかりの真剣さだ

つたから、登勢は一途にいじらしく、難を伏見の薩摩屋敷にのがれた坂本がお良を娶って長崎へ下る時、あんたはんもしこの娘を不仕合せにおしやしたらあてが怖おっせと、ついでない強い眼でじつと坂本を見つめた。

けれども、お良と坂本を乗せた三十石の夜船が京橋をはなれて、とまの灯が蘆の落かげを縫うて下るのを見送った時の登勢は、灯が見えなくなると、ふと視線を落して、暗がりの中をしずかに流れて行く水にはや遠い諦めをうつした。果して翌る年の暮近いある夜、登勢は坂本遭難の噂を聴いた。折柄伏見には伊勢のお札がどこからともなく舞い降つて、ええじゃないか、ええじゃないか、淀川の水に流せばええじゃないかと人々の浮かれた声が戸外を白く走る風と共に聴えて、登勢は淀の水車のようにくりかえす自分の不幸を噛みしめた。

ところが、翌る日には登勢ははや女中たちと一緒に、あんさんお下りさんやおへんか、

寺田屋の三十石が出ますえと、キンキンした声で客を呼び、それはやがて淀川に巡航船が通うて三十石に代るまでのはかない呼び声であつたが、登勢の声は命ある限りの螢火のように精一杯の明るさにまるで燃えていた。

(定本 織田作之助全集 第五卷 文泉堂出版、1975)